

みんなで創ろう コウノトリの里

今回のテーマは、

Vol. 3

～「こうのとりの伝説」とふるさと鴻巣～**です!**

このコーナーでは、本市に縁の深いコウノトリや豊かな自然環境とその保全に向けた取組みなどを取り上げ、本市が進める「人にも生きものにもやさしいまちづくり」についてご紹介します。

問い合わせ／コウノトリの里づくり推進プロジェクト (☎501-6809)

「こうのとりの伝説」舞台は鴻神社!



「鴻巣」という地名の由来ともいわれる「こうのとりの伝説」は、市内の鴻神社(本宮町1-9)が舞台です。

鴻神社は、明治6年(1873年)に、それまであった氷川社と熊野社、雷電社が合祀されて「鴻三社」と称されていました。その後、さらに7つの神社を合祀し、明治40年(1907年)に、社号を現在の「鴻神社」に改めています。

江戸幕府が編纂した「新編武蔵風土記稿」(1810年-1828年)には、「氷川社は、鴻巣宿の総鎮守で鴻ノ宮ともいい、鴻巣の地名の由来となる神社である」との記載があり、古くから人々の崇敬を集めていました。

この鴻神社には、コウノトリが登場する「こうのとりの伝説」が残っており、毎年10月に開催される「おおとりまつり」では、伝説に因んだパレードが行われています。

新年に、おめでたい鳥「瑞鳥ずいちよう」であるコウノトリが活躍した舞台を訪ねてみませんか?



「こうのとりの伝説」が伝わる鴻神社



おおとりまつり

「こうのとりの伝説」を紹介します

昔々、鴻巣の宮地もとみやに本宮というところがあり、そこに小さな祠が祀られていた。側には「樹の神」と呼ばれる一本の大樹が立ち、村人たちは祟りを避けるためにお供えを欠かさなかった。

あるとき祠が汚される事件が起こり、樹の神の祟りか、村を猛烈な日照りが襲った。そんな日照りの中、どこからか一羽のコウノトリが飛んできて「樹の神」の樹のてっぺんに巣を作り、卵を産んだ。

そこに大蛇が現れ、卵を飲み込もうとしたため、怒ったコウノトリは大蛇と木の上で渡り合った。コウノトリが大蛇の頭をくちばしで突き刺すと、大蛇は悲鳴を上げ不思議な光を放ちながら消えてしまった。こうして、大蛇を退治したコウノトリは無事に卵を守った。

すると、それまでの日照りが嘘のように突然雨が降り出した。またそれ以来、樹の神が村人たちに祟りを起こすことがなくなった。

村人たちはコウノトリに感謝して新しい祠を祀り、ここを鴻ノ宮(現在の鴻神社)と呼ぶようになり、地名も鴻巣と呼ばれるようになった。

このような「こうのとりの伝説」が今に伝えられています。



昭和20年頃の鴻巣駅「鴻ノ巣」と表記されている



徳川家康が関東に入封した後、鴻巣の地で徳川家康、秀忠、家光の3代に渡って、徳川将軍家が鷹狩りをしていたことは知っているかな? 儒学者の林羅山(1583年～1657年)は、三代将軍徳川家光の鷹狩りに従って、たびたび鴻巣を訪れていたんだけど、その林羅山が著した「羅山文集」に、こうのとりの伝説のことが書かれているんだ。江戸時代の初めには、お話が知られていたんだね。将軍家光も、林羅山から「こうのとりの伝説」のことを聞いていたかもね。

参考資料／鴻巣市市史編さん調査会 編『鴻巣市史 民俗編』(1995年5月)

